

2007.11.27

外間 明美

(沖縄平和ネットワーク)

主尋問に答えて

第1 沖縄ノートの3つの柱

1 沖縄と日本本土との歴史について

日本人と沖縄の人との関係。沖縄で日本ナショナリズムの思想が強くなされた。

沖縄の人間が日本国の体制になかに組み込まれてゆく、そして皇民化教育の徹底によってどのような民衆意識が作りあげられ、1945年の悲劇にいたったか。

2 日本国憲法の中に沖縄はなく、米国、米軍基地の中にあり、そのことを反省したいと考えた。

戦後日本の復興、発展が、講和条約の発効、独立の出発点から、沖縄を本土から切り離し、アメリカ軍政のもとにおいて巨大基地化することを根本の条件としてこと、それが沖縄にもたらした新しい受難について書く。

3 沖縄の渡嘉敷島の元隊長が沖縄を訪れるということを新聞で知った。上記の第1、第2の柱を考えて、アジアと日本に問いかける。そして自分自身に問いかける。

自分を含む現在と将来の日本人について、このような日本人ではないところの日本人へと自分をかえることはできないか、と問いかけ、答えてゆこうとする努力が、この「沖縄ノート」の第3の柱をなす。

第2 日本人の沖縄の人達に対する態度を明らかにしたい。

沖縄の人が沖縄を考えたときと、本土の人が沖縄を含む日本の歴史を考えたときにできる食い違いを「大きな裂け目」と呼んだ。渡嘉敷島に行った主事隊

長の態度と沖縄の反応との食い違いに、まさに象徴的に表れる。

第3 自分への反省を含むとは

私は新しい憲法の中で繁栄していく日本に育った。しかし、沖縄は憲法の中にない。基地を含む憐れむべき状況、大変な状況にある。

沖縄への隊長訪問がそれを表面化させた（1945年の悲劇を忘れ、問題化しなくなっている本土の人間の態度）。

第4 全体の文脈の意味は

歴史の上での日本、沖縄戦の中の日本、それを現地の資料を使って明らかにし、言及する。「隊長命令」とか書かずに「日本軍の命令」によって書く。「鉄の暴風」には「赤松」の名前は書いてあったが、「沖縄ノート」に名前は書かなかった。それは日本軍が行ったものとして個人の名前を出さなかった。隊長個人の資質の問題ではない。

普通の人間が、軍の中で非常に大きい罪を犯しうるというのを主題としている。悪を行った人、罪を犯した人、とは書いているが、人間の属性として悪人、などという言葉は使っていない。

第5 大江氏が沖縄戦の実相をどのように捉えてているか。

死者が700人と越えるこの（「集団自決」）事件が、何故おこったのか疑問に思っていた。そして32軍の強制があった（等）という話を牧港さんから伺った。「軍官民共生共死」という方針があると教えられ、戦陣訓の「生きて虜囚の辱めを受けず」ということも浸透していた。それが原因だと考えた。

日本軍、32軍、慶良間列島の守備隊という「タテの構造」、そして皇民家教育を受けてきた島民というタテの構造の中で島民達が日々、島での戦闘が最終的な局面にいたれば、「集団自決」の他に道はないという認識に追い詰められてきた。

第6 結論

慶良間の「集団自決」のついて、現在も、やはり日本軍の命令と考える。「沖

縄ノート」の出版後も沖縄戦に関する書物は読んだし、この裁判が始まるころから新証言も発表されている。それらを読んで、私の確信は強くなった。

反対尋問に答えて

- 1 原告弁護士：「『沖縄ノート』に、『アイヒマンのように裁かれてしかるべきであった』と書かれているが、私たちは、この部分を渡嘉敷島の元守備隊長が大量虐殺の責任者としてアイヒマンになぞらえて絞首刑にされてしかるべきであったと書かれていると読みとったのですが、大江さんは、『陳述書』の中で、戦争の考え方について、旧守備隊長とアイヒマンは、考え方が逆なんですと書いておられますし、アイヒマンと守備隊長をなぞらえて絞首刑にすべきだと言っておられると、読みとるのはまちがいなんだと言われておられますが」

大江氏：「アイヒマンがやろうとしたことは、ドイツの若者がもっている罪責感を自分が公開の絞首刑に処せられることによって拭いてやろうとしたわけです。アレントの本をよくお読みになるとわかります。アイヒマン自身は自分がナチスの虐殺の実行者として犯罪を犯したという意識は最後までありません。彼は、実際にナチスの罪悪を犯したのは、自分たちの指導者であるといっています。アイヒマンが自分の罪責感、罪障感をもったということは私も書きませんし、ハンナ・アレントも書いていません。」

- 2 あまりにも巨きい罪の巨塊

巨塊 = 大きな塊。「集団自決」で亡くなった多くの人の死者のかたまり。

原告のいう罪のかたまり (= 極悪人) という意味ではない。

- 3 「赤松さんが、大江さんの本を『兄や自分を傷つけるもの』と読み取ったのは誤読か」という原告弁護士の質問に対して

「赤松さんは私の『沖縄ノートを』読む前に曾野綾子さんの本を読むこと

で（『沖縄ノート』の）引用部分を読んだ。その後に『沖縄ノートを読んだそうだが、難しくて分からなくて読み飛ばしたという。それは、曾野綾子さんの書いた『ある神話の背景』通りに読んだ、導きによって読んだ、といえる。極悪人とは私は本に書いていない。」